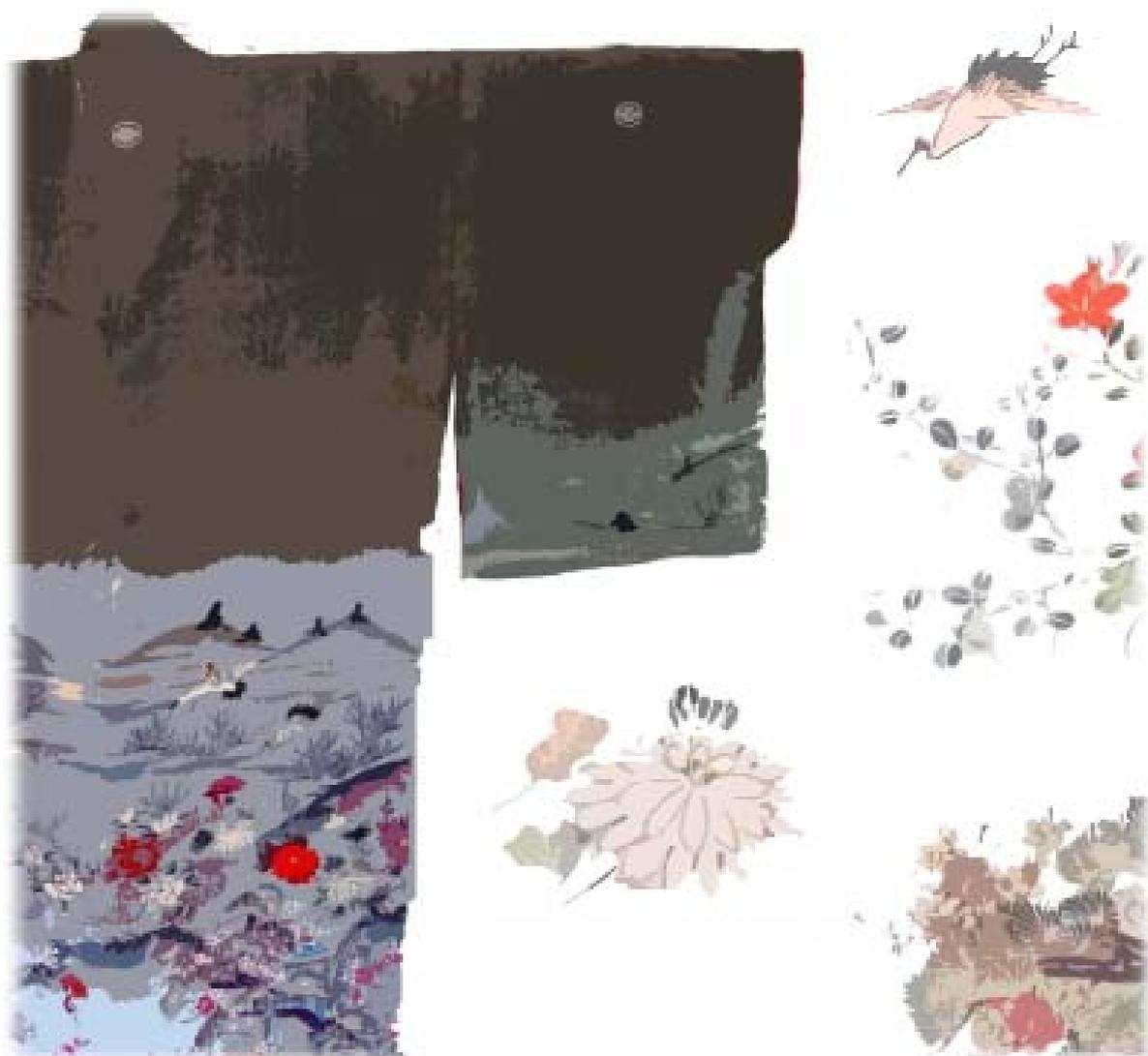


開館 40 周年記念特別展「チガサキコレクション」第 2 弾



「めでたい着物」展

おかげさまで
文化資料館は

開館 **40** 周年 茅ヶ崎市文化資料館
Chigasaki City Museum of Heritage

www.city.chigasaki.kanagawa.jp/kankou/8137/010670.html

ごあいさつ

昭和46年7月1日に、茅ヶ崎の歴史、文化、自然を守り伝えるため開館した文化資料館は、平成23年7月1日に、開館40周年を迎えました。

「茅ヶ崎」にこだわり続け、40年にわたり博物館活動を展開してきました。その間、まちの自然・歴史を調査・研究し、収集・保存してきた資料は5万点以上に上ります。その資料たちの中から選りすぐりの自然誌、民俗、考古資料を展示する、開館40周年記念特別展「チガサキコレクション」を開催いたします。

その第2弾である本展では、約1万点収蔵している民俗資料の中から、近世から昭和初期にかけての貴重なハレのめでたい日の「衣」を紹介する「めでたい着物」展を開催いたします。

本展示会の企画・設営には、開館以来、フィールドワークや資料整理にご協力いただいている市民ボランティアのみなさまの多大なる貢献をいただきました。この場を借りて、深く御礼申し上げます。

2011年10月

茅ヶ崎市教育委員会



晴れ着を着た少女たち（昭和10年頃）

時間の中で

人々が日々の生活を営んでいく中で、時間の経過をはっきりと認識する機会があります。日常を「ケ」と表現した場合、ケでなくなる状態があります。それは普通と異なる特別な機会、お祭りや行事が行われる時です。この状態を、「ハレ」と民俗学では表現します。

1年の中では、年中行事を行うときに「ハレ」です。一方、人はこの世に誕生してから死にいたるまで何度か折り目が作られています。誕生、成人、結婚、死が人生における「ハレ」です。

こうした年中行事や通過儀礼は、現代社会においては形式的になってしまっているものが多くありますが、かつての人々は時間の経過を認識し、日常生活の順調な展開をすすめていくために行っていました。今回展示しました「めでたい着物」は、その中でも特に「祝い」の行事や儀礼に関係するもので、茅ヶ崎で暮らした人々の文化の核となる部分を発見することができる貴重な資料です。

誕生と成長

人生の重要な折り目の第一段階は、この世に出生した生命体が、次第に人として体をなし、文化化^{ぶんかか}される過程であり、子育て、しつけがなされていくことです。

茅ヶ崎市では、妊娠5カ月目の戌の日に、妊婦の腹に帯をまく「帯祝い」で、女性がみごもったことを祝うことが最初の儀礼となっています。その後、出産・誕生、宮参り、食初め、節句、年祝い（七五三）などの通過儀礼を経ることで、子どもの不安定な靈魂の安定化が図られます。人生の第一段階の諸々の儀礼の際に着たのが子どもの祝着^{いわいぎ}です。時代は変われども、子どもの健やかな成長を祈願する親や親族、地域の人々といった大人の想いを伝えてくれる貴重な資料です。

*1…ある環境に生まれた人が、その集団の文化を学習していくこと。



婚姻

茅ヶ崎では、嫁となる女性が^{むこ}の家に移ることをもって婚姻が成立し、社会的に承認される嫁入婚が、明治～昭和初期にかけて行われていました。仲人を通じての家と家との結びつきを重視していました。現在の恋愛による婚姻とは異なり、婚姻する当事者の配偶者選択の自主性は極めて低く、婚姻の成立にあたり、娘の両親などの承諾を得るための婚姻儀礼が重視され、その後に嫁が配偶者の家に移る祝言^{しゅうげん}（披露宴^{ひろうえん}）が盛大に行われました。



婚姻儀礼の際に着たのが、婚礼衣裳です。鞆は、黒羽二重の紋付羽織に仙台平の袴、嫁は角隠しの打掛姿でした。

普段着

かつて多くの人が農業、漁業を生活の糧としていた時代、仕事をするときと、結婚式などの人生の節目や年中行事などの特別な日の服を区別していました。

農作業をするときの野良着は、農作業を効率的に行うための構造をしていて、袖口が短かったり、袂がなかったりします。今では家着という考え方の衣類が存在しますが、かつては家にいても外にいても仕事をしており、大きな違いはありませんでした。

夏の間、着物をほどいて洗い流しをして繕いなおし、冬を迎える前は、綿入れやはんてんの準備をしました。着物は何度も縫い直し、最後は子どもものに仕立て直しました。それも着古したら雑巾にして、最後まで使いました。着物を縫ったり繕ったりするのは主婦や年寄りの仕事でした。

万祝（マイワイ）

相模湾を望む茅ヶ崎市では、昭和30年代まで、漁業を営む人々が多くいました。万祝は、そんな茅ヶ崎のかつての漁師の面影を今に伝えてくれる貴重な祝着です。

江戸時代に、房総半島から流行したといわれています。予期しない漁獲高だったとき、大漁を祝って、船元や網元が漁に従事する人たちに贈りました。万祝の習俗は、房総を中心に静岡県から青森県までの沿岸地域にかけてみられます。地域ごとにさまざまな絵柄を染めつけています。万祝をもらえるような大漁は、一生に一度あるかないかといわれています。この万祝は、その後仕事着としても使われたためか、袖が筒状に繕われていて、これを着ていた海の男の粋な姿が目に浮かびます。

本展で紹介するのは、日露戦争をテーマにした絵柄のものと浦島太郎が描かれたものです。特に日露戦争を描いたものは、全国的にも大変貴重な資料です。



着物の合理性

着物は曲線の素材を用いたものは一つもありません。全て直線の布で形作られています。着る人によってその形を変えることはありません。大人と子供、男女では寸法は異なりますが、構造は同じです。一方、洋服は、裁断に多くの曲線を用いた素材が用いられ、その形は時代性、趣向により異なります。

基本的な構造は、体、腕、足をすっぽりつつむように円筒形につくられ、胴体も丸味をもった形で包むように作られています。人の体の形を無視したかのような形をしていて、一見すると不合理です。しかし、祖母や母親が着ていたものが娘のものになり、体格が異なっても縫い直しができるという合理性をもっています。



着物の製作に用いられる反物の長さや幅をみていくと、人の体をすっぽり包んでしまいます。そして前身頃、後身頃の布をそれぞれ肩から前後に垂らし、それに両腕をつけるという簡単な構造で着物は成り立っています。布地の幅が、人の体を基につくられているのです。体を深く包みこみ、1本の紐で着ることができ、寸法の変更ができるきものは、くらしの中で生まれた独自の「衣」として考えることができます。

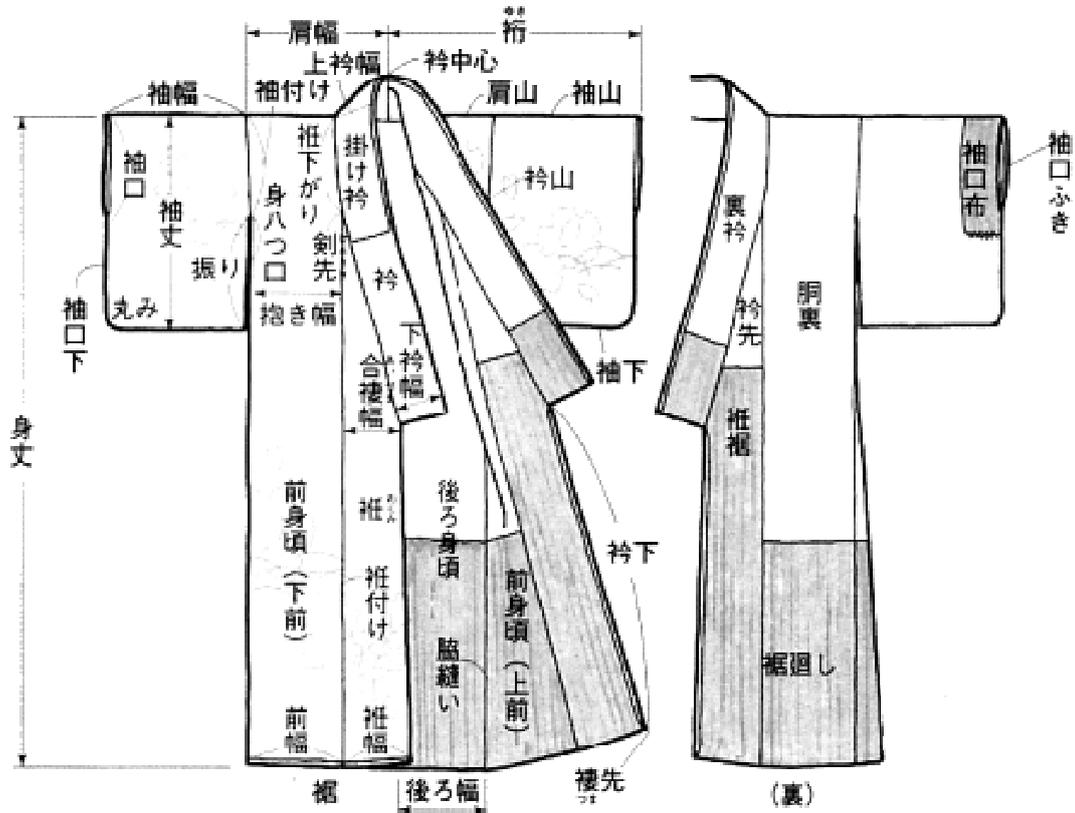
さいごに - 「モノ」を集めて「コト（記憶）」を保存する -

モノを集めるということをしている、もしくはかつてしたことはありませんか？モノを集める「コレクション」は、人間の「獲得する」という本能に結びついていると言われています。モノを集める行為の起原をたどっていくと、旧石器時代にさかのぼることができると言われています。博物館の歴史の始まりは、そういった個人コレクターとそのコレクションなのです。それでは、博物館がモノを収集して保存することと、個人コレクションの違いはなんでしょうか？

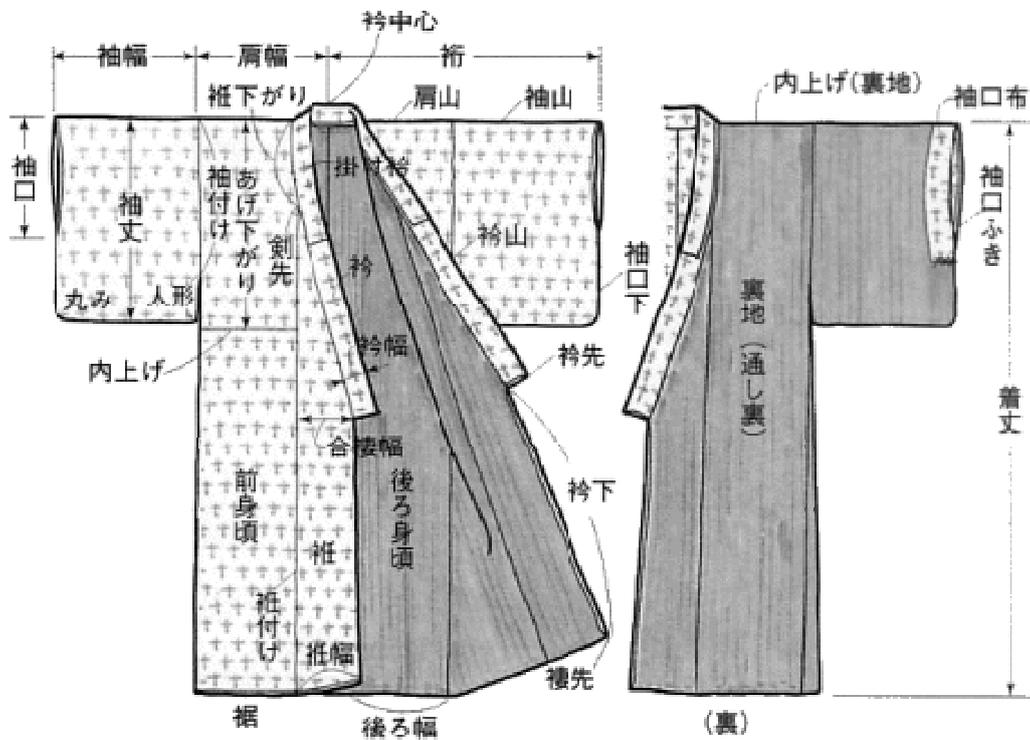
一番の違いは、博物館や美術館は、社会や地域のニーズに応え、学術的な研究に基づいて、計画的かつ合理的にモノを収集し、地域だけでなく国の大切な財産として保存していることです。テーマにそって収集したものを、時間やかたち、特徴といったものに依りて並べ展示することで、新たな価値や感動を生み出します。そして、博物館は、モノとそこに含まれる**情報（コト）**を、次世代に伝えるという社会的な役割を担っていることです。

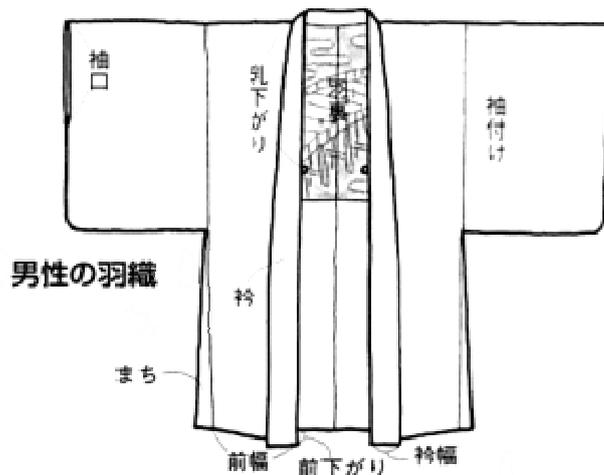
今回の展示会の場合でいう「コト」は**茅ヶ崎の民俗**であり、かつての**人々の記憶や想い**です。それらを記録、保存し、次世代に伝える役割を担っていくため、文化資料館は今後も市民のみなさんと協力した活動を展開していきます。

女物衿：部位名称



男物衿：部位名称





主な着物に関する用語

- 長着（ながぎ）…着物のこと。前を合わせて帯を締めて着る。季節により、単、裕、綿入れがある。
- 単（ひとえ）…裏のつかない長着のこと。着物は季節と着る物との約束事がはっきりしていて、単は六月から九月まで着るもので、六月と九月は厚地の単（御召、縮緬、紬、銘仙、縞・紺木綿など）、七、八月は薄地の単（紹、紗、綿紹、しじら）だった。
- 裕（あわせ）…表地に裏地を縫い合わせた衣服を意味するが、習慣上は裏のついた長着をさす。裕長着を着用するのは十月から五月末ぐらいまでで、六月からは単長着に代わる。
- 綿入れ（わたいれ）…防寒のため、表布と裏布の間に綿を入れた着物。羽織、どてら、ねんねこ、胴着、ちゃんちゃんこなどをいう。
- 留袖（とめそで）…既婚女性の礼装用和服。白襟を重ねた黒紋付き（五つ紋または三つ紋）で裾に模様を置く。宮中及び未婚女性は色染めの色留め袖を着る。
- 羽織（はおり）…和装用外衣の一種。長着の上に着るもの。羽織は一番外にはおるもののため、身丈、用布、模様、羽織ひもに流行があらわれる。
- 打掛（うちかけ）…着流しの重ね小袖の上に羽織って着る小袖。近世の武家女性の礼服。現代では婚礼衣装に用いる。
- 紋付（もんつき）…長着や羽織に家紋を付けた衣服の総称、礼装用。紋付が一般に礼服と定められたのは明治維新以後、袴が廃止されてからである。一つ紋がもっとも略式なもので背紋と袖紋をつけた三つ紋付き、さらに抱き紋を加えた五つ紋を最も正式な礼装とする。
- 袴（はかま）…和装の二部式の下衣。本来は両足を別々に通すもの。古墳時代に男子の衣褌として存在し、近世にいたるまで長く男子の正装として用いられた。
- 帯（おび）…和服を着るとき、腰の辺りに巻いて結ぶ細長い布のこと。丸帯は、一枚の幅広の帯地を二つ折りにして一端を紝け合わせた帯。袋帯は、袋織り（布の両端が表裏

接合され、筒状になる織り方)の帯。丸帯が重いことから、明治以降、その代用としてできた。袋織りのものを本袋帯といい、その多くは無地裏の片側帯で、表地と裏地を別々に織ってかがったものを縫い袋帯という。

生地に関する主な用語

- ◆縮緬(ちりめん)…緯糸に強撚糸を交互に打ち込んだ絹織物の総称。しぼという小さな皺が特徴の高級和服地。
- ◆メリンス…メリノ羊の毛で薄く柔らかく織った毛織物。唐縮緬ともいい、主に女性の和装地、裏地などに用いられる。
- ◆御召(おめし)…御召縮緬の略称。糸の段階で精練し、先染めしたのち織り上げた先練織物の代表的なもの。
- ◆銘仙(めいせん)…熨斗糸・玉糸・絹諸撚糸または紡績撚糸でおった絹織物。無地・縦縞・縞物などがある。
- ◆紅絹(もみ)…赤または緋色に染めた薄手の絹布で、生地は平絹や節絹が多く用いられる。昭和の始めまでは、女物の上等の着物の胴裏地は若向きは紅絹、年寄り用は白絹が決まりのように用いられた。
- ◆綸子(りんず)…経緯とも無撚の生糸を使い、織り上げてから精練する後染め、後練りの絹の紋織物。主として無地染め、喪服・帯・裏地などに使われる。
- ◆緞子(どんす)…紋織物の一種で、縹子織りを主として模様を織りあらわしたもの。
- ◆錦紗(きんしゃ)…縮緬の一種。糸が細く、軽く、縮緬表面の凹凸であるしぼが細かく平滑で光沢がある。
- ◆塩瀬(しおぜ)…絹織物の一種。細い横畝が密に並んだ厚手で、しなやかな高級和服地。
- ◆羽二重(はぶたえ)…撚りのほとんど無い糸で織った平絹・後練りの絹布。光沢があり柔らかいのが特徴。軽くて滑りがよいので多くは裏地として用いられるが、厚地のものは男物紋服・女物喪服として用いられる。
- ◆紬(つむぎ)…紬糸で織った絹織物。紬糸は、真綿を引きのばして細く糸にしたもの。普段着で、上等なものはよそゆきに用いられる。
- ◆紹(ろ)…夏の高級和布地、薄地で軽量、隙間の多い織物で通気性に富む。

開館 40 周年記念特別展「チガサキコレクション」第 2 弾 「めでたい着物」展

主催 茅ヶ崎市教育委員会

茅ヶ崎市文化資料館(担当:佐藤 彩、須藤 格)

協力 民俗資料整理グループ

発行 平成 23 (2011) 年 10 月

<http://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/kankou/8137/010670.html>